



12年前日記

1999年12月24日
(金)

山田夫妻

『12年前日記 1999年12月24日(金)』

【1999年12月24日(金)】*2011年12月24日(土)記

7時30分起床。どうやら遅刻しないで済んだようだ、このまま二度寝しなければ、だがな。しかし体調もバッチリだ。なんか今日はいいことがありそうな予感がする。自慢じゃないが俺のこの手の予感は結構当たる。今宵はヤレちゃうかも。

従軍するときにはこうと思っていた、勝負パンツにはきかえ、気をひきしめる。やったるで〜。

8時30分、ホテルの玄関にトラックタイプのバンが停まる。申し訳なさ程度に天井と側面に幌のついた荷台に乗るらしい。トラックのケツから荷台に乗り込む。

左右に向かい合わせの長い椅子。俺が腰掛けた向かいの椅子の正面に20代ノルウェー人カップル、その隣が2、30代のアメ公カップル。俺の横に、20代とおぼしきイタ公三人組。

臭いしろんぼばっかし。逆にこいつらの体臭が臭いから、オープンエアでよかった。臭いのを自覚しているのか、香水をおもいっくそふりかけているが、そのきつい香水の下から獣臭さが朝からもう出てきている。はあ〜、先が思いやられるぜ。

半袖は日本代表の俺とノルウェーの半袖ポロシャツ野郎。もしやもしやの胸毛をはみ出させ、腕毛もモジャモジャト。反則じゃん。毛皮着ているようなもんだ。こんなに比べたら、俺のオケケなんてパイパンよ、パイパン状態。もしくはうれし恥ずかし生え出し中学生並み。

車は山並みに向かって疾走。幌の役目はほぼない、吹きっさらしだ。高いB払って罰ゲーム状態。しろんぼ臭が充満してもいいから、せめて普通のワゴンなら...

ああ、吹き荒ぶ風にピチ半袖じゃ腰が冷える。しかも大き目の半袖をピチ半袖の上に着込んでくるのを忘れた。昨晚セーターを買えばよかった。寒さに寒イボと弱気が出てくるが、半袖日本代表として、一步もひくわけにはいかん。

先手必勝。暑いぜよと袖をまくること、タンクトップかと思紛うばかりを胸毛野郎に見せ誇る。よもや攻撃の手をゆるめじ。

マッチでタバコに火をつけるふりをして、マッチの火で暖を取る。もう風が強くてなかなか火がつかないとマッチ売りの少女ス〜くありやと何本もマッチをこする、芸の細かい日本人の器用さをアピール。

手違いで火がついてしまったので、仕方なく紫煙を燻らす。紫煙が猛烈な風で後に吹き飛ばされる。タバコ先をさりげなく、かじかんだ手先に近づけて、暖める。

車はちょうど山道の悪路に差し掛かり、車が揺れるたびに根性焼き状態になる。根性焼きが熱いのを逆手に「あつい、あつい」と、まるで半袖タンクトップ状態でも暑いかなのようにふるまう。

と、ノルウェー半袖ポロシャツ野郎も寒いのか、ボタンを首のどこまでしめようとして、胸毛がからまって困っている。

試合には勝ったが、どうやら勝負に負けた模様の腹具合に。強風に吹かれ過ぎたか、なにやら腹がゴロゴロキュルキュルと不審な音を。追い討ちを掛けるように、根性焼きにならぬようタバ

コの火先ばかり見ていたからか、山道に酔い始めた頃、最初の目的地に到着。

10時、その男、象の背なに乗って、鬱蒼とした密林のジャングルの道なき道をゆく。

象使いには見えない。青ざめた顔に時折り苦悶の表情を浮かべる。真っ赤に充血した目にうっすら涙を浮かべ、カサカサに乾ききった唇からくぐもった嗚咽を漏らす。オェ～。

明らかに象酔いだった（そうそう、このくだりを抜粋してどっかに発表したけど、この種明かしも行くよ。ついついカッコつけてしまったが、この後には次の一文が、「時折、腹痛が襲うのか腹を押さえては、苦悶の表情を浮かべる」が入る、そんな12年後の俺情報）

そうなんです、象酔いだけでなく、腹痛も、どちらかと言うと腹痛の方がひどい。なんて、他人事のように実況中継して、自分の身に振りかかったつらい現実を誤魔化しながら、象酔いの吐き気と定期的に段々間隔を狭めて襲ってくる便意に耐えていた。

象の上で、上のお口と下のお口から同時にパオーンした日には、「あその長男、象印、象印」とご近所でヒソヒソ陰口を叩かれて後指をさされることは想像に難くない。なんとか気合で象に乗り切り、川を渡った気がするし、木の枝に首を挟まれた気がするし、新発売の象印みたいにならずに、象の背を降りる。

12時頃、昼飯タイム。トイレに駆け込む。一応ご報告をば。超安産でした。元気な男の子みたいうんこでした。さて、昼飯代はツアー料金に含まれているらしいので、食べないと損なので、まだ気持ち悪いし、お腹の方も大事を取っておきたいが、腹が減っては戦が出来んとパクツク。追加でホットコーヒー（20B）も飲む。五臓六腑に染み渡るうまさ。

13時過ぎ、川下りに向かうため車に乗り込む。川下りの川を見下ろす小高い丘に降り立った頃には、調子は短期間で完全復活。快調快調と胸毛野郎に微笑む。敗者にも哀れみを。

じゃあ、日本人の器用なのが手先だけではないところを見せてやろう。菊のご門も器用なところを見せてやろうと、快気祝いの祝砲代わりに屁の一発もひねりだすかと、得意のすかしをかましてや...あ！

ココで臨時のお知らせです。ここから暫しの間のこのノンフィクションはフィクションです。実在のいかなる団体や個人や物体Xなどとは一切関係ありません。

まさかのもしや...た～ま～や～！ 違う違う、サンタさんが突然やってきた、そして粹な、いや、活きなプレゼントを置いていった。

なんちゅうか、ちょっとだけ川下りしちゃったみたい、お先です。たぶん濁流の小川が太股をさらさらさらーって伝っていく感じがしないでもない。

が、これ以上先には行かせん。ワッ、うんこ踏んじゃったって感じで右膝を90度曲げて、即席のダムを作る。膝の裏に濁流が溜まる、この得もいえぬ感触。それこそ、うんこ。この状態で左も決壊したら...ブリッコジャンプをするハメに（意味プーチン。←2011年の流行語大賞）

進退極まり、ガイドを呼ぶ。もちろんガイドの風下に立ち、十分な距離もとっている。さりげなく重心を右に傾けながら、トイレの場所を聞く。さすが腐れ観光地、川に降りる中腹あたりにある小さな小屋が公衆便所らしい。

なるべく、すかしっ屁をしようとしたらウンコを漏らしてしまい、慌ててトイレに駆け込む日

本人風に見えぬよう、ゆっくり下って――今、下ってるのは坂ですからね、勘違いしないでくださいよ――トイレに駆け込む。

扉を開ける。タイ式のトイレで助かった。タイ式のトイレは金隠しのない和式便所。後、和式便所と違い、ボタン部分に直接ボタンする。金隠しを背にして、跨ぐ感じだ。片隅の大きな水桶になみなみと水が張ってある。浮いている手桶を右手で持ち、水をすくっては、局部に掛けながら、不浄の左手で菊の御紋を洗うわけだ。

そっとズボンとパンツを徐々におろす。トイレひとりストリップの前はまだ最後の、一縷の望みがあった。もしかしたら、全部気のせいという。汗汗、大量のドロリとした汗。

勇気を出して下を向いて、直撃取材、本当のところはどう...うわっ...。昔の言葉で言うところの、「私、脱いだらスゴイです」状態。

まあ、最初から分かってましたよ、匂いでね、プロですから、ええ。

まずはまだ被害の少ないズボンを上手に脱いでから、安全地帯に避難させる。若死にした勝負パンツを脱ぎ捨て、片隅に投げ捨てる。

さあ、これで下半身はスッポンポンだ。

アレコレ考える前に、まずは出すものは全部出し切りましょうか。

よっこいしょういちと便器を跨ぎ、消化試合を粛々とこなす。

俺はこんなことをするためにチェンマイくんだりに来たんじゃない。ちきしょう、自棄酒だ。自分、今日はガンガンいきたいんで、手酌で失礼しますとかつぶやきながら、ジャパジャパ手酌でアナルに水を掛けて、左手でゴシゴシとキレイにする。浴びるようにかけにかけまくる。おしりも足も特に右膝ダムもきれいきれい。大きい桶に直接飛び込む案もあったが、最後に流し湯できないので却下。

最後は手をキレイに洗って、きれいさっぱり。なみなみと湛えてあった水桶はもう半分以下に。

最後は証拠隠滅のお時間ですよ～。勝負パンツはタイはチェンマイの奥地のトイレにこのまま置き去りにする。クソの役にも立たない勝負パンツに最後の一瞥をくらす。

よかった、勝負パンツだからって戦場ネーム「よしおとよしこ」って名前書いておかなくて。

なんかさあ、敵地に重傷を負った戦友を置き去りにするみたいで、後ろ髪が惹かれる思いが。きっとすぐに迎えに来る、かならず助けにくると言いながら、ちょっとだけ子供を捨てる親の気持ちがあった（おひさ、2011年の俺。そういえば、まだ救出にすら向かってないや、こんなダムの役にも立たねえクソパンツを。元気かな）。

問題はズボンだ、ズボンチェック。右足の内側部分、そして肛門あたりに転々と茶色いシミが。

今回、タイにはズボンは一本しか持ってきていない。替えのズボンがないので、捨てるわけにもいかない。

もっと身軽に取材したいが、パンツ一丁で取材するわけにはいかんし、かといって新しいズボンを買う金ももったいない。これぞ、自称プロ戦場特派員ならではの苦悩だろう。

なかなかトイレから出てこない日本人を心配したのか、ガイドがトイレの扉を叩く、「オ

ッケー？」と。

タイ人と日本人がタイでイギリス語を話し合う醜悪さとか言ってる場合ではないので、「もうちょっと待って」と生きていることだけは伝える。

どうやら、このまま外で待っているらしい。まだ心の準備が、下半身はスッポンポンだけど。もはやズボンの中身を全部取り出して、悠長に洗っている暇はない。ズボンの内側に泥がちょっと跳ねたと思えば、履けないことはないし、もう履くしかない。ええい、ままよ、やるっきゃ騎士。

なるべくズボンの内側に触れぬようにズボンを履くも生身と半乾きの生身がぶつかる。俺の生足だ生尻と固まりかけた生うんこがぶつかる。

ほとんど乾いているのが救いだ。こんなに長い時間トイレに籠っていたら、ひどい便秘か、うんこ漏らして後始末に時間がかかっていたかの二択しかない。

一応、ひどい便秘で困っちゃうとアピールするため、アナルを押さえながら「お・ま・た」と勢いよく扉を開ける。

まだピカピカのノーパン一年生で恥ずかしい、馬子にも衣装、「捕まえて御覧なさい」と言わんばかりに、一気にガイドと距離を稼ぐ。

「本当に便秘の方だから、もうエッチ」とホカホカのノーパンを気取られないように素知らぬ顔で川でも下るか川の方に行こうとすると、皆さんはもうとっくの昔に川下りに行ったらしい。

ガイドは車で下流に移動して、待ち構えるとのことで、勝手に置いてきぼりにした俺を拾って、駆けつけなきゃいけないらしい。

川下り代を返せ、もしくは腹下し代を払え、せめてパンツ代を。他の奴らが払った銭の分、まんまと川下りを楽しんでいる間、俺は腹下り、沈没してびしょぬれと日本語で軽やかに冗談口を叩く。

てか、このガイド、窓かすきまからまさか一部始終を見ていたんじゃ。それじゃあ、今日から俺のあだ名は姓は「すかしウンコ漏らし」、字は「パンツ捨てマン」みたいなのに既に決まってるんじゃ。

本代表として恥ずかしくないうんこ漏らしを正々堂々で行なえたか振り返る。走馬灯のように努力の一コマコマが駆け巡る。

しゃがみこんだ姿勢でバランスを保ちながら、片足をあげて、右手で水をかけながら、左手でアナルを洗う、ワンワンプレイなんてファインプレイもの。

水を前からかけたほうがいいのか、後からかけたほうがいいのかスランプに陥ったこともあった。

タオルがないから、何度も何度も犬のようにブルブルして、ケツ毛から雫を振るい落とすのは気迫溢れるガッツプレイだった。

大丈夫、どのプレイもフェアプレイでベストを尽くした。

そんな青春を賭けて戦った日々を恥ずべきではない。そもそも参加することに意義があるんだ、こういう競技は。

川下りの終点ポイントに車が停まった。ピックアップトラックでよかったあ。

俺は胸を張って、「どうか、このことは皆には黙ってください」と小声の日本語。唯一の目撃

者もいざとなったら…。各国のバカどもが川下りから戻ってくる頃には完全犯罪設立。

帰ってきた臭い集団はうんこより臭い。しろんぼどもの香水は薄れ、しろんぼ臭が前面に。

こりゃ、俺のうんこの匂いもまぎれるって仕組みだ。もし少し匂うとしたら、それは点々とズボンについている茶色い染みのせいで、俺のせいじゃないと開き直った。

まさに神風の再来だった。

15時頃、でもノーパン羞恥プレイは続く。ウンコのついたズボンをノーパンではいたまま、カレン民族の村に見学に行かされる。

村中を好きに見学して、写真も撮っていいらしい。手工芸品を売りつけられるが、パンツは売ってないので、何も買わず。需要と供給がうまくいかない。

しかし、気もそぞろ過ぎだ。村の隅っこで気分は時効を待つ犯人。ある意味、今の俺の方が少数民族だ。

人望のなせる技か、放し飼いの犬だ豚だ子供が俺の尻に寄ってきて群がる。時に自称プロ戦場特派員は毅然とした厳しい態度を取らざるを得ないときがある。

シッシッと追い払う。

実はこのトレッキングツアーには、カレン族の村にお泊りコースもあったのだが、日帰りコースにしておいて、ホントよかった。先見の明、我にあり！

さて、ココからまたノンフィクションに。お忘れ、これはお堅いノンフィクション。まさかい年こいた、自称プロ戦場特派員が仕事サボってウンコもらしだなんて、そんな三文小説のシンデレラストoryみたいなことがあるわけない。

言い訳するわけじゃねえけど、コレはねえ、天災いや、もう労災みたいなもんですよ。エースが肩壊すとか、料理人が包丁で指を切っちゃうとか、スナックのションベンホステスあけみが本当の愛が分からなくなるとか、その類の自称プロ戦場特派員稼業という厳しい仕事特有の職業病みたいなもんだ。

そもそも人間なんてちっぽけな存在です、すかしっ屁中の不意なうんこ漏れの前には。ひれ伏すがいい。

もはや人智を超えていたのだ。いかに科学技術が進歩しようとも、人類はいまだにそれを防ぐ手段を得てはいない。エテ公と一緒に、人類も。

同じ状況になれば誰だって私もアナタも同じハメになっていただろう。や〜い、うんこ漏らし。今回たまたま俺がババをひいて、ババを垂れ流してしまったわけだが、こんなもんロシアルーレットみたいなもんで、誰にも等しく同じことが起るはず、起れ、お前にもお前にも全員に。

今後もうんこ漏らしの話題が出るかもしれないが、その部分だけはフィクションだから、各々方、よきにはからえ、同じ日本人でよかったと思わせてやっからよ。

16時頃、帰りの車では念には念を入れて、ちゃんと風下になるように一番後ろに。

イタ公3人組を奥に行かせる。隣のイタ公との間にかばんを置く。

目の前のアメ公カップルは幸いウトウトしている。鬼畜米英め。しかし今はまだ時期ではない。少なくとも俺はお前らなんか一度も負けたことはない。などとなるべくうんこのことは考えないように想いをあちこちにはせる。

夜が近づき、また冷え込んできた中を疾走しているが、どうやらお尻の下の例の塊がずっと座っている熱で溶け出したほんのり香る匂いが。さりげなく尻を浮かして、空気椅子。

17時、ようやく長い一日を終えて、ホテルに戻る。いや～、トレッキングツアーってホント命懸け。ギリギリの綱渡りだった、一度奈落の底まで落ちたけど、ここまで這い上がってきた。

戦士に束の間の休息もない。さっそくホテルのバスタブに生温いお湯をはって、ホテルから抜き足差し足忍び足。

17時30分、私の姿は市場にあった。もちろんノーパンクソズボン姿のまま。50Bで洗剤とたわしとハンガー。

ちょっと、何に使うかなんて、下衆な想像しないでよ。...想像にお任せします。ご想像の通り、ええ、そうよ、うんこズボンに洗剤まぶして、たわしでゴシゴシ洗って、ハンガーに干す気満々よ！

18時、ホテルの部屋に戻り、揃えた洗剤、タワシ、ハンガーを使いウンコズボンをゴシゴシ。うんこを洗うくらいなら、早く仕事がしたくて仕方がない。

一通り洗ったが念には念を入れて、今一度浴槽にぬるま湯をはり、洗剤を大量にばらまいて、うんこズボンをしばし浸す。

うんこズボン待ち。この無駄な時間よ。しかしコレも自称プロ戦場特派員の仕事の一環。この経験が後々生きてくるかもしれん。

1時間待ったら、またゴシゴシ洗って、よ～く絞ったら、キレイに干して証拠隠滅。

こんなことばっかしてるけど今宵は折しもクリスマスイブ。チェンマイでの日帰りトレッキングツアーに1000Bも突っ込んで、主にうんこを漏らしただけ。今年のクリスマスイブの思い出はうんこ漏らし(1000B)。

あくまで比喩表現ですが、そんなクリスマスイブは大人の味、ホロ苦い思い出。

洗っているときにウンコのおつりがはねたとか邪推はやめてください。あくまで比喩表現ですから、ええ。

とある事情で胸いっぱい腹いっぱいになって、夕飯は抜く。

21時、もうすることがないし、体を清めたいけどうんこの後のお風呂を頂くというのもアレだし、そもそもぬるま湯だし、お尻と手だけ洗って、サンタさんを待って早く寝ることにする。

サンタさん来ないかなあ、今年のプレゼントには新品アナルが一押し！

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ～。

『12年前日記 1999年12月24日（金）』

<http://p.booklog.jp/book/41368>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41368>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41368>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.